

Departure English Expression

Departure を使った自己表現活動： 生徒が英語を楽しんで使いながら基礎定着を図る



大釜賢子

青森県立田名部高等学校の英語表現の授業では、アウトプット活動を通じて英語の基礎を定着させるために、教科書を使った「書くこと」と「話すこと」の自己表現活動を充実させています。本稿では、*Departure English Expression I・II Revised* を使った授業実践例を紹介します。

◆本校の英語表現授業の特徴

生徒の自己表現活動を最優先する本校の英語表現の授業は、教科書 *Departure* の構成・内容に基づいています。教員による文法の明示的な説明はできるだけ最低限にとどめ、ほぼ全ての活動をペアワークやグループワークで行っています。それは、生徒同士の学び合いの中で生徒に文法の誤りを発見させるためです。自己表現活動までの演習のつまずきや間違いは生徒の記憶に残る気づきにつながるので、大いに歓迎して全体で共有し、生徒同士で答えを見つけさせます。このように生徒が主体となって文法を理解していく過程の積み重ねが、「書いてみよう」や「話してみよう」といった実際に文法を使って定着を図る流れにつながります。

1・2年次ともに、自己表現活動では教科書の各レッスンの最後（Iでは‘Write a Paragraph’，IIでは‘Express Yourself’）に与えられたテーマで自由英作文をします。生徒はあらかじめ50（2年次は80）～100語程度の自由英作文をして授業に臨みます。1時間の授業は、生徒同士の「口頭での共有」と「添削」に分かれています。共有の部分では、ペアを替えて口頭でのやり取りを7回繰

り返します。1～3回目までは、自分の書いた英文をパートナーに伝えます。4回目からは英文を見ないでパートナーに伝えます。そのため、3回目の共有後に英文のキーワードを頭に入れる時間を1分間与えてから4～6回目の共有を行います。7回目の相手には、自分のことではなく、6回目のパートナーから聞いた内容を伝えます。

共有の部分では、生徒に英文を繰り返し話させることによって英語の基礎定着を図る狙いがあります。回数を重ねるごとに生徒の英語の流暢さが増し、学習した言語材料も徐々に自動化していきます。また、「書く」「話す」だけでなく、「聞く」姿勢にも良い影響があります。パートナーが使った表現を自分でも使い始めるなど、ここでも生徒同士の学び合いが起こります。

◆英文の添削のしかた

共有が終わったら、生徒同士で添削をします。生徒には、渡された英文の動詞のFormに注目させ、ミス（自力で修正できる間違い）をペンで修正させます。添削が終わると、また別の生徒の英文が回ってくるので、同様に添削します。これを3回ほど行います。3回目の添削の後には、内容に関する素敵なコメントを2分間で書かせます。3回目に添削した英文は書いた生徒に直接返却させます。その際、口頭で相手を褒めてから、間違いの部分を指摘させます。

生徒同士の添削で、「書くこと」の正確さが徐々に増していきます。動詞の欠落、時制、主語と動詞の一致、態、分詞の形などは、この段階で

よく修正されます。クラスメイトの英文を通して、文法を意識させ定着させるよう仕掛けています。また、「書く」だけでなく、自分以外の英文にたくさん触れさせながら、「読む」力や優れた作品を書きたいと思う気持ちにも働きかけます。

授業の最後に、生徒は英文の語数で自己評価をします。例えば、あるテーマについて80語程度で書く場合、70語以上で「A」、60語以上で「B」、50語未満で「C」となります。特に1年次は、正確さよりも流暢さを伸ばす狙いがあるので、語数で評価させています。入学時からレッスンごとにまとまった英文を書かせているので、ほとんどの生徒の評価は「A」になります。そして、自分の英文で、教員に添削して欲しい文を1つだけ蛍光ペンでなぞらせて提出させます。

教員は次の授業までに蛍光ペンの生徒の疑問部分にだけ添削を加えます。蛍光ペンの部分以外のミスやエラー（自力で修正できない間違い）を全て直したい衝動に駆られても、生徒の疑問点だけを添削し、返却します。これは東京学芸大学名誉教授の金谷憲先生の「教師が熱心に添削すればするほど、生徒の学習意欲が低下する」（金谷憲・堤孝 [2017]『レッスンごとに教科書の扱いを変える TANABU Model とは』アルク選書）という「添削のパラドックス」に由来しています。確かに、生徒の立場になってみると、せっかく書いた英文が教員の添削で赤だらけになって返ってきたら、また書こうという気持ちにはならないと思います。私たち英語科の教員ですら、例えば「話すこと」が苦手だと感じているところへ、言い間違いや修正をされると話す気が失せてしまうという状況に重ねることができるかもしれません。このように、アウトプットをたくさんさせて流暢さを伸ばし、徐々に正確さを増していく考え方は、教員の添削指導にも反映されています。

また、限定的な添削は、教員の負担を減らし「持続可能な」添削指導につながります。教科指

導を最優先に教材研究や個別の添削指導にたっぷり時間を割くことができるのが理想ですが、我々教員はさまざまな校務等に追われていることも事実です。しかし、いくら多忙とはいえ、「生徒に書かせたものの、添削できずに生徒を待たせたまま時間が経つ」、「添削する時間がないから書かせられない活動はさせない」、「ライティングの添削はALTに全てお任せ」では自己表現活動の甲斐がありません。このような状況を改善するためにも、限定的な添削は有効です。それほど時間がかからない上、生徒1人ひとりにピンポイントで直接フィードバックできます。ALTではなく教師自身が添削することで、生徒のミスやエラーが見えてきます。共通するものは、次の授業で全体で共有しながらフィードバックします。生徒と教員の双方にとってメリットの大きい持続可能な添削指導です。

◆生徒が「楽しい」と思える授業を

英語表現の授業を通して、生徒は4技能を伸ばしながら自己表現活動をととても楽しんでいきます。特に「書くこと」「話すこと」に関しては、もともと書いたり話したりすることができるから活動が楽しいというよりは、楽しいから書きたくなる、話したくなる、できるようになるのではないかと思います。その点、*Departure* はIもIIも自己表現活動のテーマが楽しく使いやすいです。

中学校時代から、ほぼ毎日英語の授業はあります。相当な時間を英語学習に時間を費やしていても、英語の基礎が定着していない、苦手だと感じる生徒は多いようです。本校の英語表現の授業は、生徒に自由にとことん英語を使わせます。活動をペアやグループで実施することで生徒は1人で抱え込まずに済むので、英語が苦手な生徒の負担を減らすこともできます。生徒が英語を使う時間を十分に設け、定着を図る流れを繰り返す循環を生み出すことが教員の役割だと思っています。

（おおがま さとこ・青森県立田名部高等学校教諭）